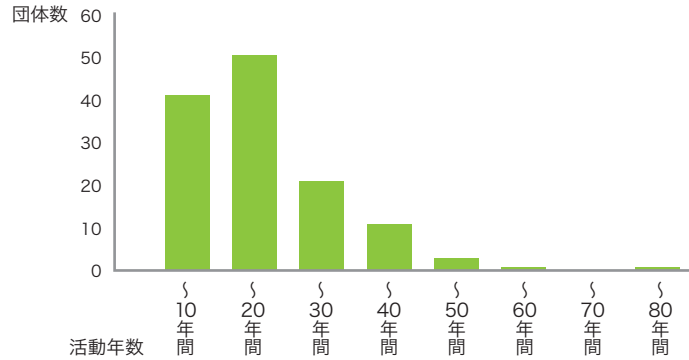


# 12. 「生物多様性を守る市民の活動」

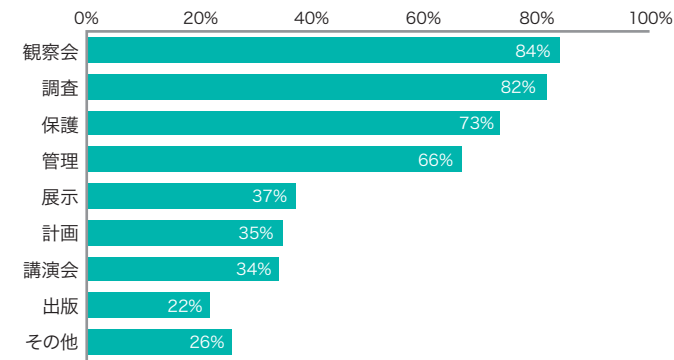
## 生物多様性を守る全国の市民団体の活動内容

調査には全国から147の団体に協力いただきました。里やまで活動する団体が最も多く、次いで河川や都市緑地で活動する団体となっています。活動年数別に見ると、10年以上活動しているベテラン団体が多くなっています。



それらの団体の活動で最も一般的だったのは観察会で、次いで調査活動、保護活動、フィールドの管理活動などでした。図にあげた8種類の活動のうち平均すると各団体の活動種類数は5種類となっていました。

### ◎活動の内容(複数回答)



## 活発化する市民調査

調査を実施している団体が84%にのぼったことは驚きです。単純な比較はできませんが、2000年に実施した同様のアンケートでは調査を実施している団体は46%に過ぎませんでしたので、市民による調査活動がより一般的になってきたのかもしれない。調査内容のうち最も多かったのは植物(全団体の61%)で、次いで鳥類、植生、水環境、魚類となっていました。生き物だけでなく、歴史(22%)や人と

自然のふれあい(21%)も多くみられました。

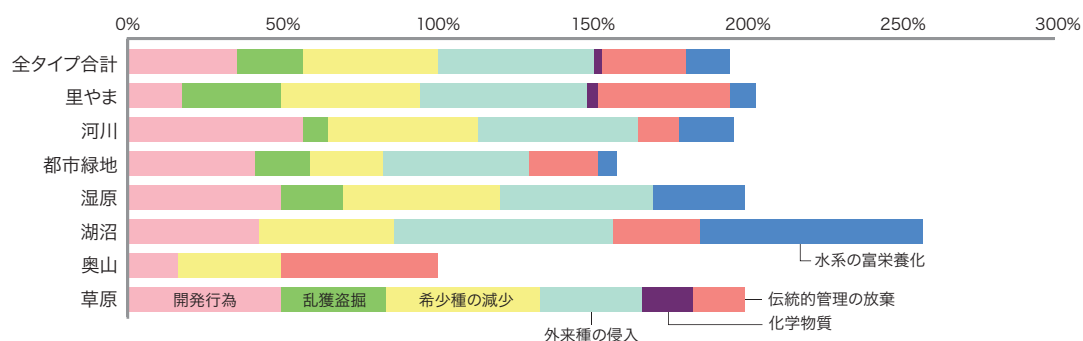
もう一つの特徴は、複数の調査を実施している団体が9割以上とほとんどで、平均4.8項目の調査を実施していたことです。複雑な生態系の変化を読み解くには様々な角度からの調査が必要とされていますが、多くの市民団体がそれを実践しているようです。

## フィールドに迫る脅威と、自主的な保全活動

フィールドの生物多様性を脅かす要因として最も多く報告があったのが「外来種の侵入(全団体の50%)」で、次いで希少種の減少(44%)や開発行為(35%)などがあげられました。生態系タイプ別にみると、図のように乱獲盗掘は里やまや草原タイプの場所で特に多く、伝統的管理の放棄

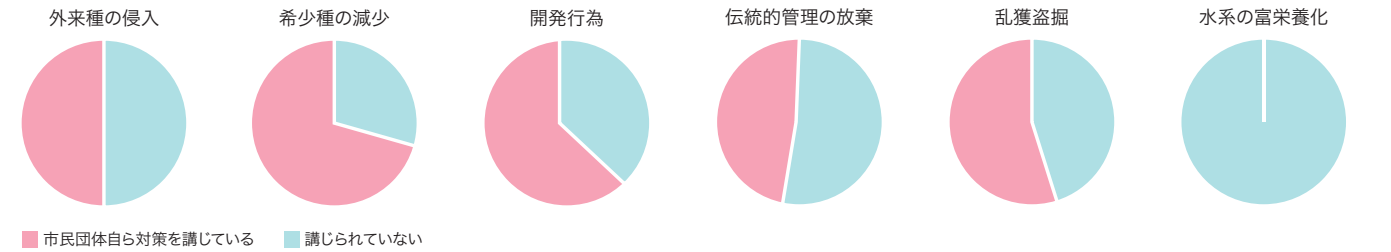
は里やま・奥山で、富栄養化は湖沼や湿原で多く「脅威」として挙げられているという違いがありました。一方、共通点として全てのタイプのフィールドが複数の脅威に同時にさらされているという深刻な状況にあることも明らかとなりました。

### ◎全サイトに占める比率(積み上げ)



アンケート対象となった約7割の団体が、こういった脅威に対して何らかの自主的な保護活動やフィールド管理活動を実施していました。特に希少種の減少や開発行為に対しては、市民団体自らが対策を講じている場所が多くみられ

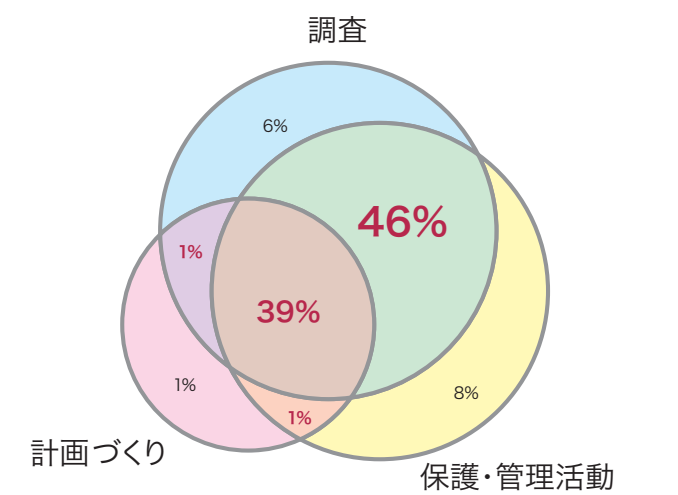
ました。外来種や伝統的管理・富栄養化の自主的な対策の割合が低くなっていたのは、効果的な対策に地方自治体や地権者・周辺住民など、幅広い協力が必要なことが要因かもしれません。



## 地域の市民が担う日本の生物多様性保全

フィールドの生物多様性の保全のためには、保護・管理活動を進めるとともに、調査によって現状を把握したり、活動の効果を評価することが重要です。また、様々な方が関わる場合には、保全計画を作ってフィールドの目標像を共有したり、役割分担を明確にしておくことが大切です。

アンケートの結果、調査活動と保護・管理活動の両方を実施しているのは実に全体の85%にのぼり、そのうち39%の団体は計画作りも行っていました。行政や専門家の関わる保全対策事業の多くが計画だけであったり、調査だけであったりする場合、各地域の市民団体こそが、各地の生物多様性の保全を着実に進める担い手となっていることを表しているといえます。



## 生物多様性モニタリングに不可欠な市民調査

2010年10月に名古屋で開催された生物多様性条約COP10では、これからの10年間で生物多様性保全を進めるための新しい計画が作られました(新戦略計画)。そして、その計画を支える科学的なデータを得るために生物多様性を地球規模でモニタリングする「グローバル生物多様性観察ネットワーク」の構築も進められています。

地球のすみずみまで広大な範囲を継続的に調査すること

は専門家だけでは困難で、これまで地域で地道な調査を続けてきたNGOや市民による調査が必要不可欠です。またそれだけの実績も持っています(NACS-Jが運営する環境省のモニタリングサイト1000里地調査など)。条約のモニタリングネットワークにも地域の人たちが行なう生物多様性のモニタリングも組み込まれ、地域の保全に活用される必要があります。

## おわりに

### 身近な自然とともに生きる“豊かさ”

各地から届いたA4サイズ9ページに及ぶ調査用紙には、そのほとんどに地域の生物多様性と生態系サービスについての記述がぎっしりと書き込まれていました。現在はともかく、昔の様子についても記入欄いっぱい書き込まれていたのには驚かされました。日常の暮らしの中での生きものとの出会いや、「とる」「食べる」「つくる」「遊ぶ」といった、身体ごと生き物とふれあった記憶が残っていたからでしょうか。

50-60年経った今でも、数多くのホタルが飛ぶかつての様子について、読んだ私たちにその光景を想像させてくれるほど、いきいきとした多様な表現で報告がありました。それは見た人の心に何かが焼き付けられていたからでしょう。日常の中で、このような心が振れる瞬間があることこそが“豊かさ”ではないでしょうか。

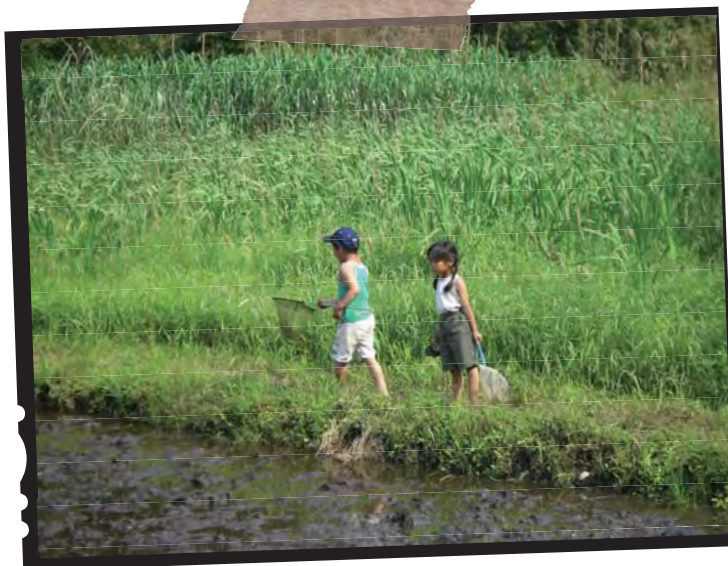
調査結果から、今の暮らしは、生き物との関係が濃密だった昔の暮らしとは随分変わってしまったことが分かります。しかし、形を変えて、身近な自然とともに暮らす“豊かさ”を紡ぐ新

しい活動が生まれていることも知ることができました。自然観察会や調査、森・里やま・川・湿地・海辺・緑地などの保全復元といった生き物や自然と身体ごとふれあう活動が全国で数多く報告されました。

中には、地域の自然を活用した保全型の経済活動を視野に入れ、身近な自然とともに地域で生きていく道を探る試みがなされていることも分かりました。

これら身近な自然とともに生きることの豊かさ、大切さに気づいた地域が、地球上のそこそこに生まれ、積み重なって、未来に続く生物多様性の道を作っていくのでしょうか。そんな地域や市民とともに、行政も企業もNGOもCOP10で決議した生物多様性保全の新目標達成への道のりを歩まねばなりません。

最後に、保全活動の合間をぬって、「生物多様性の道」に登録し、本調査にご協力くださったみなさま(別掲)の日頃の保全活動に敬意を表するとともにこの場を借りてお礼申し上げます。



## 生物多様性の道プロジェクトとは

### 生物多様性の実感を地域の暮らしに引き戻す

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)は、これからの10年の新しい目標「生物多様性の損失を引き起こす根本の原因に対処し、これ以上の損失を止めるためのあらゆる方策を講じる」を決め、幕を閉じました。

この間、さまざまな「生物多様性」をめぐるイベントや報道が活発になされましたが、生物多様性保全への取り組みはいよいよこれからが正念場です。

日本自然保護協会では、関心が高まりつつある生物多様性保全を、COP10という政治的交渉・議論のレベルから、現場の保全活動や地域での暮らしのレベルに引き戻し、地域の人たちが生活実感を持って、主体的に生物多様性の保全を進めていくことを再確認するために企画、実施しました。

国際会議でよりよい保全目標が決まることは大事な一歩ですが、立派な目標が立てられても言葉だけであったり一部関係者だけのものでは、保全は進みません。保全の意識がひとりひとりに芽生えてこそ持続的な生物多様性保全の取り組みが進みます。

一方、「生物多様性」の言葉を使わなくても、日本各地

の森林や河川、干潟、里やま、湿地、海辺で生き物と生態系を保全する取り組みは、NGOや市民、専門家、自治体等によって以前から行なわれています。これらの活動が、日本の生物多様性保全を牽引してきたといっても過言ではありません。これらの人たちがCOP10の新目標に掲げられた重要な保全の担い手なのだ、ということが広く伝えられたでしょうか。また、会議の席についた政府関係者はそのことを深く認識したでしょうか。地域で地道に保全活動をしている人たちと、条約の目指す国際的な生物多様性保全が遠いものであっては、COP10で決議されたさまざまな行動計画の実効性は確保できません。

生物多様性の道プロジェクトでは、2009年7月から2010年10月までの期間、具体的な地域の保全活動を通して、生物多様性保全の大切さを感じとることができる6つの活動を実施しました(<http://www.nacsj.or.jp>)。

本書は、その活動の1つ「市民が五感でとらえた地域の生物多様性と生態系サービスモニタリング」の調査結果を紹介したものです。

### 日本の生物多様性—「身近な自然」とともに生きる

市民が五感でとらえた地域の「生物多様性」と「生態系サービス」モニタリングレポート2010  
2010年10月発行

著者：NACS-J生物多様性の道プロジェクト 生態系サービスモニタリングチーム  
企画・解析・執筆：開発法子、廣瀬光子、高川晋一、小此木宏明、篠原光礎

編集・デザイン：結デザインネットワーク

デザイン・イラスト：蒲原久雄

写真：伊藤信男、青木邦夫、依田宏、萩原清司、朱宮丈晴、出島誠一、福田真由子

発行：日本自然保護協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトヨビル2F

TEL. 03-3553-4101 FAX. 03-3553-0139

<http://www.nacsj.or.jp>

© NACS-J